

天の石屋 古事記 上巻

天照大御神が忌服屋に坐しまして、神御衣を織らせておいでになりました時に、須佐之男命は、突然に其の服屋の頂に穴を穿けて、天斑馬の皮を剥いで、其れを、そこから投げ入れなさいましたので、織機を織つて居た天衣織女が、これを見て、びっくり仰天した際に、手にして居た梭で、陰上のあたりを衝いたために、即死してしまひました。

天照大御神はこれを御覧になり、大いに御驚きあそばして、天石屋の中に御入りになり、其の石屋戸を閉てゝ、籠り隠れておしまひになり

ました。それで、高天原も、葦原中國も、悉く真闇黒になつてしまつて、永い闇黒の夜が連きましたので、数知れぬ悪い神々が騒ぎ起つて、其の荒れ騒ぐ響は、恰も蠅の沸き起つた様に沸き上り、数知れぬ禍は、悉く起つて、人心は全く不安の底に陥つてしまひました。

そこで、高天原の八百万の神々が、天安之河の河原に御集りになりまして、種々と御相談をなさいました結果、高御産巣日神の御子の、思金神といふ神に、天照大御神を石屋戸の中から御誘ひ出したてまつるべき方策を考へさせましたが、思金神の御考によつて、常世長鳴鳥を集めて、これを鳴かせ、それから、天安河の河上から、堅い

石を採つて来て鐵礎と為し、また天金山から鉄を採つて來、天津麻羅といふ鍛工を召し出して、伊斯許理度売命に命じて、この天津麻羅を指図して、御鏡を御造らせになりました。また玉祖命に命じて、八尺の曲玉の五百箇の御統の珠を御造らせになり、尚また天児屋命と布刀玉命とを召し出して、天香山で獲た牡鹿の肩の骨を、丸抜きに抜き取つて、それを天香山から採つて來た波波迦といふ木で灼いて、太占のトヒを行ひ、それから又、天香山から、枝葉の繁茂つてゐる常磐の色も見事な真賢木を根抜ぎにして來て、其の上の枝には、八尺の曲玉の五百箇の御統の珠を取著け、中の枝には、八咫鏡を取懸け、下の枝には、白和幣、青和幣を取著け垂らして、此等の種々の品物は、皆大御神にたてまつる御幣帛として、布刀玉命が此れを捧げ持つて奉り、また天児屋命は、鄭重な祝詞を奏し上げて、大御神の御出ましを御祈禱申し上げ、尚ほ又、天手力男神と申す神が、石屋戸の掖に隠れ立つて居て、大御神の御出ましを御待ち申すことゝいたしました。そればかりでなく、天宇受売命は、天香山から採つて來た日蔭葛を櫛に懸け、真拆葛を髪飾の鬘となし、また天香山から採つて來た小竹の葉を束ねて、手草として手に持ち、それから天石戸戸の前に、中が空洞になつてゐる空槽を伏せて、宇受売命は其の上に立つて、足

を踏み鳴し、神懸がした様な状態になつて、乳房も露はに胸を開けはだけ、裳の緒も下腹のところまで押下げて、番登が見える位になさいましたので、これを御覧になりました八百万神々は、高天原も揺り動くかと思はれるばかりに、一度にどつと御笑ひになりました。

そこで、天照大御神は不審に思し召されて、天石屋戸を細目に開けて、内より仰せられますには、「わたくしがこの石屋戸に籠り隠れて居るからには、高天原も聞く、また葦原中國全体も真闇暗になつて、皆々当惑いたして居るであらうと思ふのに、何由に天宇受売は面白さうに歌ひ踊り、また八百万神も咲ひくづれて居るのであるか」と仰いで居るのでござります」と申し上げました。

かやうに申し上げてゐる間に、天児屋命と布刀玉命が、彼の八咫鏡を指出して、天照大御神に御見せ申したので、天照大御神は、いよいよこれを不審に思し召されて、稍ばかり石戸の内から出て、外方を窺ひ御覧になりましたところを、かの石戸の掖に隠れ立つて居た天手力男神が、大御神の御手を執り奉つて、石戸の外へと御引出し申し上げてしまひました。此の時速く、布刀玉命は、尻久米繩すな

はち注連縄を、大御神の御後方に控き渡して、「これから内へは、決して決して御入りあそばしますな」と申し上げました。

かくて、天照大御神が御出ましあそばされましたので、高天原も、葦原中國も、自から明く照り輝きましたから、誰れも彼れも皆、歓喜び安心をいたしました。が、高天原の八百万神神は、御相談の上、速須佐之男命に千位置戸を出さしめ、また其の鬚と手足の爪とを切つて祓を行はしめ、その上、速須佐之男命を高天原から遠くの国へ逐ひ放ることにせられました。